

日本簿記学会ニュース

No. 43:7 / 2007

《部会の経過報告》

第23回関西部会は平成19年5月26日(土)に大阪市立大学(準備委員長:坂上 学氏)にて開催されました。詳しい内容は本紙部会記をご覧ください。

《全国大会のご案内》

第23回全国大会を下記の予定で開催いたしますので、お知らせいたします。

開催日 平成19年8月27日(月)～29日(水)

場所 横浜国立大学(横浜市)

統一論題 「簿記教育を巡る諸問題」

第1日(8月27日)

学会賞審査委員会, 理事会

第2日(8月28日)

参加者受付 11時30分～17時40分

会員総会 12時30分～13時30分

学会賞受賞報告 13時35分～13時55分

研究部会報告 14時00分～15時10分

統一論題報告 15時30分～17時40分

司会・座長 中野常男氏(神戸大学)

報告者 三浦 敬氏(横浜市立大学)

成川正晃氏(高崎商科大学短期大学部)

粕谷和生氏(横浜市立横浜商業高等学校)

桑原知之氏(ネットスクール株式会社)

懇親会 18時00分～19時30分

第3日(8月29日)

参加者受付 9時10分～16時40分

自由論題報告 9時30分～12時00分

記念講演 13時00分～14時30分

講演者 大藪俊哉氏(横浜国立大学名誉教授)

統一論題討論 14時40分～16時40分

本大会のプログラムは、日本公認会計士協会の「CPE認定研修」に申請中です。なお、詳細につきましては、大会ホームページ(<http://www.business.ynu.ac.jp/boki/>)をご参照下さい。

《各種委員》

平成18年8月28日(月)に開催された第22回全国大会理事会において、学会誌編集委員に和田博志氏(近畿大学)の追加が決定されました。また、ホームページ委員長 佐々木隆志氏(一橋大学)の留学に伴い、高橋賢氏(横浜国立大学)への交代が決定されました。

《平成18・19年度研究部会のメンバー追加》

平成18・19年度研究部会のメンバーが以下のり追加されました。なお、現在、入会申請中の方を含みます。

簿記教育研究部会「簿記教育と倫理のフレームワークに関する研究」部会長:浦崎直浩(近畿大学)

追加メンバー:島本克彦(兵庫県立姫路商業高等学校),菅原 智(広島修道大学)

王 春山((中国)東北财经大学会计学院)

簿記実務研究部会「会計帳簿の現代的意義と課題」部会長:多賀谷充(青山学院大学)

追加メンバー:福島 隆(明海大学)

日本簿記学会第 23 回関西部会記

準備委員長 坂上 学
大阪市立大学

日本簿記学会第 23 回関西部会が平成 19 年 5 月 26 日(土)に大阪市立大学において開催された。参加者は、当日 CPE 研修として参加した公認会計士の方を含め 81 名であった。今回の関西部会では、統一論題を「複式簿記と会計思想」とし、向山敦夫氏(大阪市立大学)の司会のもと、3 人の報告者を迎えておこなわれた。

第一報告は、工藤栄一郎氏(熊本学園大学)により「制約としての簿記シンドローム：ゴールドバーグの所説に寄せて」と題してなされた。会計人が「会計等式」「複式簿記」「バランスシート」というトリポダル・パラダイムに 100 年以上支えられてきたと同時に、それはまた「制約」でもあったことを示し、複式簿記を厳守することによりいくつかの内在的限界をもたらすことを明らかにした。このようなゴールドバーグの所説を じ、複式簿記思考の枠内にとどまることから来る「功」と「罪」を再検討する必要があると主張した。

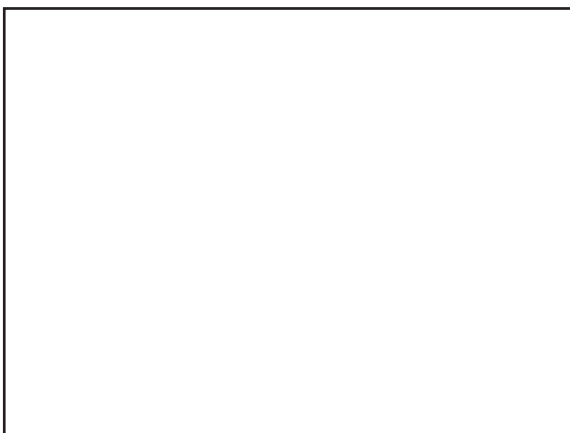
第二報告は、橋本武久氏(帝塚山大学)により「複式簿記の可能性—17 世紀ヨーロッパの事例から—」と題して報告がおこなわれた。17 世紀ネーデルラントでは、公的な分野に複式簿記が適用され、また時を同じくしてスウェーデンでも同様の試みがなされていた。この社会経済的背景として、領土にかかわる莫大な債権・債務の管理や国家財政の管理の問題を解決するためのツールとして、複式簿記が期待されていたことを指摘した。これらの事例を挙げ、複式簿記は特定の思想にとらわれない技法であり、期間損益計算と財産管理という異なる会計思想にも柔軟に対応できたと主張した。

第三報告は、藤井秀樹氏(京都大学)により「複式簿記の説明モデルにもとづく利益計算構造の理論分析」と題してなされた。会計利益を決定するためには、取引を現金収支とその原因事象の二 から逐次累積的に記録し、決済に際して財産評価を実施することが必要となるが、前者の特徴から収支簿記に類似したものであることが理解され、後者の特徴から帳簿記録の意味が主観的事業形態(経営者の期待)によって決まることが理解されることを示した。その上で、近年の基準設定では投資者の視点のみが強調され、経営者の視点の後退と複式簿記の軽視傾向

がみられると主張した。

以上の報告に対し、山田康裕氏(滋賀大学)、藤川元久氏(元広島女子商短期大学)、清水泰洋氏(神戸大学)、中村恒彦氏(桃山学院大学)、柴健次氏(関西大学)、中居文治氏(福井県立大学)、野村健太郎氏(愛知工業大学)、上野清貴氏(長崎大学)の各氏(発言順)から質問が寄せられた。これらの質疑応答をじて、会計思想が複式簿記へ、あるいは複式簿記が会計思想へどのように影響を与えてきたのか、認識論的・歴史的・計算構造的な視点から活発な討議がなされた。

開催校の会員が 1 名という中での準備作業であったが、報告者の方々の他に、森川会長代行として開会のご挨拶をいただいた新田忠誓副会長(一橋大学)、準備作業に的確な指示をいただいた菱山淳氏(専修大学)、CPE 研修の手配をいただいた佐藤信彦氏(明治大学)をはじめとする関係者各のご協力に対し、この場を借りて感謝申し上げたい。



楽しみながら学ぶ、学びながら楽しむ

西南学院大学 土方 久

この私が「日本簿記学会賞」を頂いたことに、まずは、お礼を申し上げねばならない。この大賞の創設者、急逝された安平昭二先生の勤務された兵庫県立大学（旧神戸商科大学）で受賞したことに感慨深く、簿記学者として認知してもらったようで、有り難く感謝している。

さて、標記の言葉は、私が尊敬する久野光朗先生から、学者の「理想的な姿」と教えられた言葉である。私も還暦を迎えるあたりから、この言葉を実感できるようになったようである。税理士稼業の両親、その一人息子ということでは、私は門前の小僧。簿記が嫌いなはずはない。大学と大学院の指導教授のおかげで、いくらか好きになったようではあるが、「楽しむ」とまでは、なかなか。

本来、近代会計の父であるオイゲン・シュマーレンバッハの名著『動的貸借対照表論』に取り組んで、会計理論と会計制度の関わりを解明してきたが、第8版の序文から、これが「カメラール簿記（収支簿記）」と「単式簿記」を意識しながら、「複式簿記」こそを機軸に構築されていることに気付くにつれて、私の脳裏から離れないのは、会計理論、会計制度と「複式簿記」の関わり。19世紀のドイツ簿記を解明しなければとの想いに駆られたものである。しかし、いつしか「ドイツ簿記の16世紀」に想いを馳せるようになってしまったようである。実際に19世紀のドイツ簿記に取り組むほどに、ともすれば残影を追いかけているにすぎないのでは、これでは核心に到達しえないのではとの想いに駆られたからである。

しかし、16世紀のドイツ簿記に取り組んでみると、原典が入手困難のために、国外の研究を参考にするか、入手しえたにしても、判読困難のために、勘定の断片だけを判読して、解釈されがちである。挿入される解説文は敬遠されがちである。先学の苦労は憐れられるが、これだけで「模倣」、はては「剽窃」と判断されがちなのである。「教科書」を執筆した者なら誰でも、優れた先学の教科書を参考に、自分の経験と知恵を駆使して、分かり易いように、教え易いように腐心した覚えがあるにちがいない。そう思うと、勘定の断片のみで解釈して、片付けてしまうのではなく、原典に挿入される取引例を1題ずつ

解答して、解説文も読了して、16世紀の学者の工夫と苦悩の跡を読み取って判断するものでなければならぬ。

思うに、「借方」を左側に記録して、「貸方」を右側に記録するのはなぜか。この問題に窮するのは私だけではあるまい。16世紀の学者ヨハン・ゴットリーブの解説文によると、債務者（借主）は債権者（貸主）に右手で宣誓して借入れるから、帳簿の見開きの右側に債権者（貸主）の名前、したがって、「債務」を記録すると解説される。帳簿の見開きの左側に債務者（借主）の名前、したがって、「債権」を記録するのは、これとは対照的になるからと解説されるのである。納得いきそうであるが、あまりにもできすぎた根拠ではある。これに対して、16世紀にニュルンベルクの商業学校に掲げられた木版画に組み込まれる解説文によると、「心臓」が人体の左側にあるように、帳簿の見開きの左側に債務者（借主）の名前、したがって、「債権」を記録すると解説される。憶測するに、備忘という点からは、「債権」が「債務」よりも重視されるので、まずは、見開き最初の左側に記録するのに対して、部分返済、相互貸借、貸借振替をスムーズにするために、これとは対照的に、帳簿の見開きの右側に債権者（貸主）の名前、したがって、「債務」を記録するのではと想像される。何となく納得いきそうな根拠である。真偽のほどは分からないが、16世紀に複式簿記に取り組んだ学者が、すでに、この問題の解答に苦悩して解説しようとしたことは間違いなさそうである。複式簿記に取り組む21世紀の学者としては、この問題に、はたして、どのように立ち向かい解説したものやら。

このように、原典を読み耽っては、複式簿記の「考古学」なら、私だけの「好古学」に浸りながら、複式簿記の謎の謎解きに挑戦していることを思うと、「楽しむ」、この言葉が実感できるようになったようである。

初学者のための簿記教育

東京理科大学 横山 和夫

私は、工学部経営工学科において「会計学」（半期22.5時間）を担当している。商学部や経営学部などにおいては簿記論の科目が設けられているが、当学部においてはその科目の履修がない。そこで、授業開始に当たり、会計学の導入の過程で仕訳の原理や簿記一巡の取引を取り上げなければならない。

《ずいひつ》

特に簿記一巡の取引の記録と財務諸表の作成は、従来、受験簿記の3級程度の内容であり、対象となる企業形態も個人企業が前提となっていた。この授業は、必要時間3回(4.5時間)から4回(6時間)をかけて演習形式で行う。次の段階で財務会計の理論と簡単な仕訳例を説明するが、その内容は株式会社会計である。初期の段階で取り上げた損益計算書や貸借対照表は、個人企業のもので、かつ、簡略な無区分T字形のものであるため、その後の説明が財務諸表と結び付かない。また、この「会計学」は、財務諸表を作る過程のほか、財務諸表を観る力、つまり、経営分析にも触れる必要もあると思った。大学で学ぶべき内容は限られた時間内ですべて取り上げるのは困難に近かった。

経営学部や商学部などでは専門知識としての会計学が必要とされ、簿記論・財務諸表論・経営分析論等の科目が設置されている。工学部の「会計学」はその目的を異にしているが、その学生90名余のうち、簿記検定試験を受験した後、職業会計人を志す者は数名である。大多数の者は卒業後、実社会で役立つ必要最小限度の会計学の知識で十分であるとしている。毎年のように初期段階で教える簿記一巡の取引の記録と財務諸表作成の問題には頭を悩まし、試行錯誤していたが、やっと一つのパターンが出来上がった。その内容は、次のとおりである。

まず、対象企業を株式会社、会計期間は設立第1期を1か月とし、営業取引は基本的な取引とし、増資、自己株式の取得など主な資本取引を加味することにより、「株主資本等変動計算書」の作成も可能にした。また、子会社を設立し、グループ間の売買取引・貸借取引も取り入れ、最も基本的な「連結財務諸表」の作成にも結びつけた。決算整理事項としては、貸倒引当金・退職給付引当金の設定、減価償却(定額法)、商品の評価、投資有価証券(その他有価証券)の時価評価、家賃の繰延、利息の見越、

法人税等の計上の8項目とし、これらの必要性も簡潔に説明する。決算整理取引は、整理後残高試算表欄を加えた10欄式精算表に記入し、損益計算書欄は総勘定元帳の損益勘定、貸借対照表欄は残高勘定のチェック手段となる手書簿記時代の必要性と現在行われている電算簿記での役割の相違を解説することとした。損益勘定によって作成する損益計算書、残高勘定によって作成する貸借対照表は、まず初学者用のT字形のもので作成し、次いで報告式で作成したものに自社のほかトヨタ自動車・日産自動車の構成比率を対比して示して、主要な経営分析を行って説明することとした。キャッシュ・フローに関する勘定は現金勘定のみとし、現金勘定は摘要欄にその取引内容を記録させ、それから「キャッシュ・フロー計算書」を作成させることとした。このほか、次の期に行われる利益剰余金処分に関する仕訳と勘定記入を行い、当期と次期の「株主資本等変動計算書」の記入例を示した。

期中に設立した子会社との連結財務諸表の作成は、売上・売上原価・受取賃貸料・支払賃借料・売掛金・買掛金・子会社株式・資本金の相殺取引を内容とし、連結財務諸表の作成にも個財務諸表と同様の構成比率を示すこととしている。

なお、財務諸表の作成に関しては、トヨタ自動車の有価証券報告書の財務諸表を示し、実務上の財務諸表について簡潔に説明を加えることとした。

このような指導方法は、専門職大学院総合科学技術経営研究科の「財務会計」半期(22.5時間)や国家機関の研修所においても行っているが、財務諸表を観る力をつけるために実務上の財務諸表や経営分析を取り入れたことで、受講者が「会計」に興味を持つようになったようである。教壇に立つ限り、今後も簿記を含む財務会計の教育方法の改善を続けたいと思っている。

事務局からのお知らせ

《住所・所属の変更について》

住所・所属の変更があった場合は、会費振込時に振替用紙にお書きいただくか、連絡事務所にメールまたは書にてお知らせ下さい。

《事務局への問い合わせについて》

事務局への問い合わせについては、連絡事務所をお願いいたします。

発行所
編集兼
発行人 日本簿記学会事務局

連絡事務所
〒101-0021 東京都千代田区外神田5-1-15
株式会社白桃書房
e-mail boki@hakutou.co.jp